アンドレイ・シニャフスキーと「狂気」の言説
――ロシアにおける精神医学と刑罰――

中　野　幸　男

1．はじめに

ロシアにおける「狂気」は古くはユロージヴィとして、小説の中ではフセーヴォロド・ガルシン『紅い花』やアントン・チェーホフ『第6病棟』で扱われてきた。「狂気」はソ連の文脈の中では、反体制活動家の強制的な精神病院への入院など精神医学と刑罰の結節点に現れる特異な現象として注目を集めてきた。

また、反体制活動家は精神病院に強制収容され、その窮状を西側で訴えてきた。1959年にニキータ・フルシチョフがあらゆる種類の反体制的、社会的逸脱を精神病と定義して以降、ソ連では精神病院収容が国家により組織的に行われ、それに対して西側では長年人権団体や研究者が非難してきた。[1]

1965年9月8日に世界文学研究所研究員アンドレイ・シニャフスキーは、パリにてアブラム・テルツ名で出版された文学作品により反ソ扇動の罪により路上で逮捕された。同じくニコライ・アルジャク名により出版し逮捕されたユーリー・ダニエルと並んで呼ばれることになる文学裁判である、シニャフスキー＝ダニエル裁判は西側で広く報道され、判決後に両者とも収容所に送られ、釈放後、シニャフスキーはパリに亡命しソルボンヌ大学教授となり、ダニエルは国内に残った。その1966年のシニャフスキー＝ダニエル裁判でシニャフスキーは裁判の3ヶ月前の1965年12月17日に法医学的精神鑑定の連絡を受け、精神鑑定の結果「責任能力あり」と認められた彼は裁判に臨んでいる。[2]

『ＧＲ―同志社大学グローバル地域文化学会 紀要―』19, 2022, 35－58頁.
同志社大学グローバル地域文化学会 ©中野幸男

本論文ではロシアにおける精神医学の発達を見ながら、シニャフスキーの1966年の裁判で議論された「狂気」が、同時代的な精神医学や刑罰についての言説といかなる関わりを持っていたかを分析する。主に文学上の問題として語られることの多いシニャフスキー＝ダニエル裁判を精神医学の観点から眺め、それを同時代人であるレオニード・プリューシチやナターリヤ・ゴルバネフスカヤの活動や回想と比較し、同時代的に彼らに関心を持ち、ペレストロイカ後のロシアにおける「狂気」研究に大きな影響を与えるミシェル・フーコーの活動にも注目することにより、ロシアにおける「狂気」研究の成果として提示したい。

ロシアにおける精神医学の発達についてはイリーナ・シロトキナの研究やそれを援用した久野の研究が存在している。[3] また近年では1880年から1930年までを扱ったシロトキナの研究以後の時代も扱ったアンジェラ・ブリントリンガーとイリヤ・ヴィニツキーによる論集や、ポスト・ソ連期を含むレベッカ・ライヒの研究が存在する。それと関連する病跡学や精神分析に関する研究も存在しているが、本論では主にロシアにおける精神医学の発達を見ることにする。[4] 先行研究との相違点は主に、プッシー・ライオットまで続く現在の問題として、シニャフスキー＝ダニエル裁判に代表される反体制運動をロシアにおける精神医学の歴史において眺めたものであること、さらには資料の面においても、フーコーにおける問題に関して、しばしばフランス語を中心として調査している研究者が見逃しがちな、亡命ロシア人の新聞などのロシア語メディアを活用しながら、フランス知識人と亡命ロシア人の間における交流とその結果について記述したことにある。

2．ロシアにおける「狂気」

ロシアにおける「狂気」を論じるにあたり、日本語およびロシア語における「狂気」とそれに該当するбезумиеあるいはсумасшествиеの定義についてまず確認する。「狂気」（безумие）はブロックハウス・エフロン百科事典の1891年に執筆された項目では「生来あるいは幼年期に生じた精神病を表

すロシアの法律用語」とある。[5] 2004年に刊行された最新の『アカデミー版ロシア語大辞典』によると口語的、転義的用法ではない意味では「精神錯乱」（сумасшествие）とのみ書いてある。[6]「精神錯乱」（сумасшествие）は1901年のブロックハウス・エフロン百科事典のCの項目には収録されていない。1882年刊行のウラジーミル・ダーリのロシア語辞典では「狂気」（безумие）は「知能の欠如、不足、貧困。知恵遅れ、精神錯乱、精神異常。間抜けさ、愚かさ。非常識な行為、無分別な行動、ばかげたこと」とある。[7] 同じくダーリの辞典では「精神錯乱（сумасшествие）」は「精神異常者、狂人の状態、行為」とある。[8] ここでは意味だけでは錯綜しているものの、特筆すべきは「法律用語」とある点だろう。

ロシアの文化的伝統は「キリストのための愚者」のカテゴリーである「ユロージヴィ」を含み、それは「気が触れた人」や「祝福された人」と考えられた。文化的役割は多様な特徴を持っていたが、ユロージヴィは裸や半裸、しばしば意図的に清潔さを欠いていて、公の場で唾を吐いたり、小便や大便をし、鎖を被り、首尾一貫しない意味不明な話し方をしていた。聖なる愚者は日常文化の一部というだけではなく、13世紀にはすでにロシア正教会の聖人として列聖されていた。イワン雷帝はときに「パルフェニイ・ユロージヴィ（ウロージヴィ）」というペンネームで書いていた。[9]

ライヒによると、精神医学の職業の急速な発展は19世紀後半にロシア文学の精神医学や精神病院への関心を高め、ガルシンの『紅い花』（1883）は病院の庭に生えた三本の赤い芥子の花から世界の悪が出ていると考える患者の運命を巡る話であり、ガルシンの小説の痕跡が見られるチェーホフ『第6病棟』では、診断の「まじないの輪／窮地」（заколдованный круг）を悪循環と捉えているが、ガルシンの作品においては創造的可能性の余地として残されていた。[10]

また20世紀初頭のモダニズムの実験は、文学的な伝統に狂気やその他の限界的な心理状態を描写するための新たなテクニックを提供した。同時に、それらはポスト・スターリン期に反体制派が強調する点でもある、芸術家としての自覚を高めるために狂気が持つ有益な点を強調した。例としてアンドレイ・ベールイ『ペテルブルク』（初版1913-14年）やヴェリミール・フレーブ

ニコフ、アレクセイ・クルチョーヌィフのザーウミの実験が挙げられる。[11]

精神医学の発達とともに「狂気」は医学的な「診断」と結びつき、それが裁判の場では精神鑑定による責任能力判断とともに「刑罰」とも結びつけながら論じられる。前近代で社会の美徳を試すためにユロージヴィにより演じられた「狂人」は、近代では裁判で責任能力の可否を問うためにその演技が精神医学により鑑定されることとなる。

3．ロシアにおける精神医学

ここではロシアにおける精神医学の歴史について述べる。[12] ロシアにおける「狂気」は、宗教による管理から世俗化を経て、精神病院に管理されるようになる。その周辺の制度的な変化について、宗教・政治における変化を中心に述べる。

1551年に百章会議が狂人は教会並びに修道院に収容するようにという命令を出した時、ロシア国家の近代化は治療に新たな段階をもたらした。1720年代には、実際には教会の管轄下に残ったものの、ピョートル1世は狂人の監督を世俗化した。同時に彼は官職を免れるために精神病を演じた貴族の家族の成員の健康状態について決定するための民事手続きについて制定した。エカテリーナ2世がモスクワやペテルブルクの精神病院の設立を監督し、最初の地方の精神病院の設立に導いた改革の立法化を行ったとき、権力の座にあることが人々に狂人であると宣告するための権威を所有していることであるという仮定は、1770年代には確認されていた。1830年代にニコライ1世はロシアで最初の民間精神病院の設立に許可を出し、哲学者ピョートル・チャアダーエフのロシア社会の批判を病んだ想像力の産物だとして退けた。1850年代と1860年代に狂人の治療を新たに創設された地方自治政府のゼムストヴォの地方機関に委ね、大学に最初の精神医学の学部を設置することでアレクサンドル二世は現代精神医学の基礎を築いた。施設のこの拡大は精神医学のトレーニングを積んだ地域の医師の数の増加やロシア帝国初の精神医学雑誌の創刊に結びついた。ロシアの監獄は1864年に精神科翼を建設し、1930年代に

創設される最初の「特殊」（刑罰）精神病院に道を開いた。[13]

修道院から精神病院へと世俗化を経た「狂気」は、その後、医学における変化と共に、マルクス＝レーニン主義に一致する形で精神病に生物学的説明が与えられる生物学化の時期を迎えることになる。

第一次世界大戦は前線から帰還する兵士たちの必要に医師たちが応えるにつれてさらなる近代化をもたらした。その直後に、革命や内戦のトラウマや社会的大変動は、一般大衆の中での精神科治療や逸脱の新たな規範とカテゴリーを流通させる必要について強調した。1920年代初頭のソヴィエト権力の統合に続いて、医師たちはマルクス＝レーニン主義そのものの哲学的前提や科学的客観性の主張を共有する精神医学の発達に注目を向けた。[14]

精神病の生物学化は、生活の組織化を主張した他の精神医学の理論の体制による弾圧に部分的に反応して起こった。これを背景に、スイスの精神科医オイゲン・ブロイラーの「統合失調症」の理論は精神障害や世界との患者の社会的相互作用の生物学的基盤を両方とも説明するための手段を最初のうちはソ連の医師たちに提供した。しかしながら、1936年の第2回全連邦神経生理学者・精神科医会議に続き、ソヴィエトの精神医学は、時間に応じたその進行に応じて分類可能な、固有の存在として精神病を見る世紀末ドイツの精神科医エミール・クレペリンの方向に向かった。このクレペリン的転換の文脈の中で精神科医アンドレイ・スネジネフスキーは出世する足がかりを得た。[15] 1951年に彼と彼の同僚は医学アカデミー理事会と全連邦神経生理学者・精神科医協会理事会の合同ミーティング、あるいは精神医学のためのパヴロフ・セッションにおいて彼らの権力の基盤を固めた。意識と存在が相互作用すると言われている、社会と生物学のメカニズムの間の関係について、彼らは再評価した。精神病の理論を生物学に従属させることで、スネジネフスキーと彼の同僚たちは客観的記述と分析への彼らのディシプリンの主張を強調し、同時に、主観的な意見に対してかなりの余地を残した精神障害の新たな分類を彼らは発展させた。この分類の感覚的な下支えは「異論派」（инакомыслие）を病的なものとみなすことを容易にすることになる。[16]

4．社会主義リアリズムと精神医学

モスクワ派精神医学の診断プロセスの中心にあるのは精神科医と患者の間の話し言葉の対話である。それは質問をしたり、回答を聞いたり、物理的行動を観察したりすることにより行われ、スネジネフスキーは精神科医が患者の症状を発見し、それらが属している障害を決定すると主張した。[17] ちょうど精神科医と患者の間で主人風を吹かせて行われた会話が対話からモノローグに移ったように、著者と読者の理想的な相互作用は本質的には完全にモノローグ的なものであった。[18]

スネジネフスキーを中心とするモスクワ派の精神医学はとりわけ文学とも相似点を見出し、ソ連社会で教条的であった社会主義リアリズムに依拠することもあった。

ライヒによると、部分的には自らの患者の芸術を評価する権威を自明のものとしているため、精神科医たちは自らの診断技術の主観性を軽視し、またモノローグ的なモスクワ派精神医学の言説だけでなく、同様にモノローグ的な社会主義リアリズム芸術の文学的言説からも彼らは権威を見出している。[19]

社会主義リアリズム芸術が現在をその歴史的な共産主義の未来に対する更新の中に位置付けようとしたように、例えば、不活発性統合失調症（sluggish schizophrenia）のような診断の標識も同様に、病気の未来の進行を、あまりに緩やかなために門外漢には見つけることができないと考えられている現在の兆候の中に見分けることを主張した。そのことは、ある与えられたテクストのプロットから共産主義に向かう現実の革命的発展を直観するように、ソ連の読者たちを社会主義リアリズムが累積的に訓練したのと同じようなやり方で、訓練された精神科医がそれらの隠された兆候を解明することを求めた。[20]

社会主義リアリズムについてはその19世紀文学とのいびつな連続性がシニャフスキーにより指摘され、彼の『社会主義リアリズムとは何か』においては、その最後に隠された疑問符や彼により最終段階で継ぎ足された彼自身

のシュルレアリスムに対する愛を語ることにより、疑問としてよりもむしろ修辞疑問として読まれた。また、タミズダートにより『エスプリ』に匿名で掲載されたことにより、その作品は単なる社会主義リアリズムに対する断罪というよりも、現在ではそれ以後のアレクサンドル・プーシキンの「空虚」論につながるロシア・ポストモダニズム宣言として読まれている。

5．精神病のシミュレーション/ディスシミュレーション

社会主義リアリズムと精神医学の関係では、作家が共産主義の未来を現在の中に位置付けようとするように、精神科医も未来の進行を現在の兆候の中に位置付ける、医師自身の主観性を軽視した特権的な診断として、社会主義リアリズムの精神医学への影響が現れることになった。

ここではライヒの考える、健康な人間が精神病を演じる「シミュレーション」とその反対の、精神病と考えられる人間が健康を演じる「ディスシミュレーション」の問題について、社会主義リアリズムと精神医学との齟齬の問題を論じる。

「狂人」を「演じる」という問題は、すでに前近代にも現れているが、ここではもっぱら道徳の次元において語られている。「ユロージヴィ」は狂人のふりをすることで社会の美徳を試し、その俗世間のヴァージョンである無邪気だが幸福な『イワンのばか』もあった。[21] 精神病を「演ずる」という問題は、背後にそれを「識別できる」という精神科医の能力の問題があり、精神医学の研究施設はとりわけ精神病を識別する特権的な能力を持つ人間を訓練するための施設として現れていた。

作者自身精神病でもあったガルシンの描いた『紅い花』で描かれる精神病者や、チェーホフの『第6病棟』で見られるグローモフのような精神病患者ではその精神病の境界が問われている。[22] 精神病院という場と特権的な精神科医が決定する精神病ではその境界が議論され、精神病院という場と特権的な診断が決定する病に対して、個人の信念がぶつかり合う構図が見られる。一方、精神医学の発達はその識別能力の訓練として行われたが、精神病院が

政治利用されるようになるにつれ、独自の問題が現れ始めるようになる。そこには「演ずる」という問題とは別に精神医学と刑罰制度が結びついた新たな背景が登場している。精神医学と刑罰という二つの権威が「診断」を特権的な位置に押し上げ、そこでは精神病は診断されるだけではなく、裁判における責任能力の有無のための精神鑑定により証明されることになる。

しかしながら、ライヒによると、社会主義リアリズム美学のモスクワ派との同化は精神病と信じられている個人によって生産されたイメージやテクストの分析に制限されなかった。精神医学のカテゴリーの皮肉な操作はポスト・スターリン期にはより頻繁になり、診断そのものの技術はますますパフォーマティヴ（行為遂行的）なものになった。同時に、二つの他の現象の成長は精神科医の注目を集め始めていた。一つは「シミュレーション」あるいは見かけは健康な人による精神病のパフォーマンスであり、もう一方は「ディスシミュレーション」あるいは精神病と信じられている人による精神的な健康のパフォーマンスである。精神医学の実践に大混乱を引き起こしたこと以外に、精神的な不調や健康のふりをすることは精神医学の社会主義リアリズム的美学の下にある自我と表現の統一を妨害した。自分自身の信念に従い話し、その信念は著者と語り手の両方の繰り返しになりがちであった典型的な「肯定的主人公」とは異なり、シミュレーターとディスシミュレーターの言葉は積極的にそれらの背後にある思想を隠した。[23]

最も一般的なシミュレーションの動機は雇用、徴兵、投獄から免れたいという希望であった。彼らの症状を意図的に悪化させたり引き延ばしたりする病人は精神病をシミュレートしているとも考えられた。対照的にディスシミュレーションは、入院から自由になり、他の理由で責任能力があると宣言されたいと願う病人に普通発見された。シミュレーションあるいはディスシミュレーションと分類されるためにも精神の不調あるいは健康の演劇化は意図的でなければならないと精神科医は主張した。意図されない装いは該当しなかった。[24]

異論派の詩人ヴィクトル・ニキペロフは1974年にモスクワのセルプスキー法心理学研究所にて彼と一緒に評価された多くの偽装者たちについて観察している。反体制派による偽装の描写は精神病を故意に演じることで、役者の

演技と実際の狂気の表出を精神科医が区別できないことを強調した。[25]

6．ソ連における精神医学と刑罰の統合

ロシアでは「精神医学」という用語は西側の医療文書を通じて18世紀末から19世紀後半にかけて一般的に使われるようになった。[26] フーコーは「精神病をつくりだしている澄み切った世界では、もはや現代人は狂人とは交流していない[27]」と語っている。ロシアでのユロージヴィのような聖性を持った「狂人」が精神病院に管理されていく過程をブリントリンガーは「ロシアにおける狂気の近代化は、彼らから特別で聖なるステータスを奪い、彼らに食事や衣服、住居を与え、平等に扱われる権利を与えた[28]」ものの、それは保護施設の到来と精神医学治療の勃興という「諸刃の剣」であったと考えている。

ロシアにおける精神医学と収容所の関係について、天田は

「精神医学化」（18世紀末から19世紀初頭）
「脱精神医学化」（1930年代～1940年代）
「再精神医学化」（戦後～1960年代）

の三段階でまとめている。[29] 天田によれば、「狂気」を精神病院にて管理する「精神医学化」の時代から、1930年代におけるスターリン期にそれはひっくり返され「狂気」は精神病院ではなく「収容所」で管理されるようになり「脱精神医学化」されるが、戦後になり今度は反体制派は収容所から精神病院に移し替えられ「再精神医学化」が起こる。[30]「精神病院」と「収容所」をめぐる過程の間で、スターリン期にロボトミー手術が禁止され、また戦後におけるイワン・パヴロフの「反射理論」は精神医学の「理論的バックグラウンド」として用いられるようになる。[31]

このように「収容所」のような政治との関わり合いの中で精神医学はその位置を変えてきた。フーコーは狂人が精神錯乱者である限りにおいてその責

任能力を免れているが、社会的存在としての人間は狂気によって罪過を犯したものと似た扱いを受けると言っている。[32] ブリントリンガーによれば、ヨーロッパやアメリカの精神科医と異なり、ロシアの精神科医は専門化が政治的勃興や革命の文脈の中で起こったため、その結果としてソ連成立前ですら、ロシアの精神医学は政治と精神病の関係を扱っていた。[33]

そのようなロシアにおける精神医学の問題は政治的問題としての「収容所」そして生理学的問題としての「反射理論」に影響を受けながら変化していくが、それはまさにシニャフスキー＝ダニエル裁判に大きく影響する背景となった。

7．フーコーとロシア

ライヒによると、反体制派が行った西側諸国でのソ連の精神医学の濫用に対するキャンペーンは、精神医学は客観的科学ではなく、社会規範の偽科学の守護者であると主張するいくつかの「反精神医学」の研究出版により、1960年代初頭に始まる西側での精神医学批判と同時に展開された。その時期に最も影響力のあった出版物は1961年に出版されたフーコー『狂気の歴史』であった。[34] また、フーコーの議論はあくまで現代フランスをモデルにした精神医学批判であったものの、反体制派によって精神医学による弾圧は、ソヴィエト精神医学や社会において実際に彼らが職場で目にしていたような無法さや政治的介入の問題として捉えられた。[35]

1964年のブロツキー裁判に続き、文学裁判として大々的に西側で報道された1966年のシニャフスキー＝ダニエル裁判は、ロシア国内からのサミズダート（地下出版）ならびにタミズダート（国外出版）の拡大の機会となり、アブラム・テルツ名でパリで出版されたシニャフスキーの作品は西側で広く読まれ、パステルナーク『ドクトル・ジバゴ』とともに、反体制知識人の声として捉えられることになる。[36]

シニャフスキーは収容所から釈放後、1973年に家族とともにフランスに亡命した。シニャフスキー裁判から亡命にかけての時期は、西側における反精

神医学言説と並んだ形でソ連における精神医学批判が反体制派により行われていた時期と重なっていたと言える。シニャフスキーが亡命しソルボンヌ大学講師となり、1975年の『プーシキンとの散歩』のような「冒涜」とも言われた作品を生み出した時期は、精神医学を濫用する権威に対する抵抗の時期でもあった。

以下にフーコーのロシアにおける受容、フーコーとロシアをめぐる1970年代の状況について述べる。

ロシアにおけるフーコー受容は、『言葉と物』は1977年にロシア語訳、1996年には『真実への意志　知、権力、セクシュアリティの彼岸で』と題された選集も出版され、『狂気の歴史』の初版露訳が1997年に刊行されている。[37] また、彼をテーマにしたシンポジウム『フーコーとロシア』が2000年にサンクトペテルブルクで行われ、同名の論集が出版されたことにも明らかなように、彼への関心自体は比較的最近のものと言える。それ以前にも彼に関する言及は見られたものの、フーコーの名前は構造主義の論集であったり、西側の文学の専門家の論文でわずかに言及される程度であった。[38]

フーコー『狂気の歴史』の初版のみ全文収録された序文ではドストエフスキーの『作家の日記』の言葉がパスカルに並んで引用されている。

「彼の隣人を閉じ込めたからといって、ひとは自らの正気を確信できるものではない」[39]

«Ce n’est pas en enfermant son voisin qu’on se convainc de son propre bon sens.» [40]

この文章はロシア語原文で見つけることは困難で、セルゲイ・フォーキンは疑わしいフランス語の翻訳はおそらく「おかしな男の夢」の中の以下の一文に関連するものであると予想している。[41]

「そしてとどのつまりは、お前は自分たちにとって危険な存在になってきた、だからもしお前が口をつぐまなければ、お前を気違い病院に閉じ込める

ほかはない、とおれに宣告したものである」[42]

«Наконец, они объявили мне, что я становлюсь им опасен и что они посадят меня в сумасшедший дом, если я не замолчу»[43]

この初版のみに掲載された序文はその後削除されている。フォーキンによるとフーコーはガリマールの二巻本選集の中でも2回しかドストエフスキーの名前を挙げていない。[44] 彼のドストエフスキーに対する距離感は、フーコーの先駆者たるジャン＝ポール・サルトルに由来する。サルトルは1945年10月29日に「実存主義はヒューマニズムか？」という講演を行い、書籍化されるとタイトルからはクエスチョンマークは消え、若者の間で広く読まれた。ここでサルトルはドストエフスキーの言葉として「もし神がいないのなら、すべてが許される」（Если бога нет, то все позволено）を紹介している。この言葉は「実存主義の出発点」として語られたこともあり、サルトルの名前と結びついているが、フォーキンによると、これはドストエフスキーの言葉ではなく『カラマーゾフの兄弟』のイワンの言葉である。サルトルの本でドストエフスキーは一躍古典作家として取り上げられるようになり、サルトルの名前と結びついた古典作家は、後続する世代たるフーコーには敬遠された。[45]

サルトルに代表されるロシア古典作家への距離の一方、同時代のソ連における社会秩序を構成する精神医学と刑罰の関わり、収容所や強制的な精神病院治療を経たロシアの反体制作家の存在はフーコーの注目を引くところとなった。

精神医学と刑罰の統合に興味を持っていたフーコーは1976年にロシアから亡命した政治的理由で精神病院に強制収容されていた反体制知識人プリューシチと面会している。[46] なお1977年6月21日にレオニード・ブレジネフがフランスを訪問し、ヴァレリー・ジスカール・デスタンに迎えられた際に、フーコーはレカミエ劇場で東側の反体制活動家とパリ市民との交歓の夕べを開催し、そこにはシニャフスキーも含まれていた。[47] ニューヨークで発行された亡命ロシア人の新聞『新しいロシアの言葉』によれば、その日にフー

コー主催でフランスの知識人のイニシアチブによりロシアの反体制活動家のために、モンジェロン（Montgeron）にある「亡命ロシア美術館」の支援委員会の創設という提案が出されていた。[48]

8．シニャフスキー＝ダニエル裁判と「狂気」の言説

フーコーのような同時代フランスの知識人とも接点を持っていた亡命ロシア人作家としてのシニャフスキーは、パリ郊外のフォントネー＝オー＝ローズに妻のマリア・ローザノワと共に自らの出版社・印刷所である「シンタクシス」を創設する。同名の雑誌『シンタクシス』はウラジーミル・ソローキンやタチヤーナ・トルスタヤ、ドミトリー・プリゴフといった現代ロシア文学の名だたる巨人を輩出することになる。美術評論家のボリス・グロイスの最初の著書もシンタクシス出版社から1989年に刊行された。[49]

シニャフスキーの創作は「地下文学」「収容所」「亡命」の3期に分けることが可能である。[50] その意味において、同じく3期に分けられるロシア精神医学史を重ね合わせてみた場合、シニャフスキーの父母の時代は「精神医学化」の時代と重なり、戦後のシニャフスキー本人の幼少期からモスクワ大学学生に至る自己形成期は「脱精神医学化」と収容所の時代、地下文学作家から亡命に至る時期は「再精神医学化」の時期と考えられる。

前述したようにシニャフスキー自身についても、裁判の3ヶ月前の1965年12月18日にシニャフスキーの法精神医学鑑定調書が作成されている。[51] 彼の1966年の文学裁判で最も知られているのは彼が「文学の講義」と呼ぶことになる「スカース」の説明の部分である。これは彼の作品を鑑定したヴャチェスラフ・イワーノフの法廷での説明によって知られることになった。そこでは一人称で語られた発言と、作者自身の意見を同一視してはならないと語られ、『リュビーモフ』における反ソ的な登場人物の発言と作者（ここではシニャフスキーの変名のアブラム・テルツ）の発言は同一のものでないということが証明される。[52] イワーノフは以下のように言っている。

「アブラム・テルツ作品の大部分はロシア文学に伝統的なスカース形式で書かれている（ここでは「スカース」は術語的な意味を念頭に置いている）。スカースの特徴は、作者と決して同一ではない主人公の人称において語りが行われるという点である。それゆえに、たとえば、（『リュビーモフ』の）一人称による小説内で行われる発言は、完全に具体的な語り手、この小説の登場人物に帰せられなければならず、全く小説の作者ではない。」[53]

ライヒによれば、シニャフスキーの創作性と狂気に関する議論は以下のような構図で行われている。シニャフスキーの主張では、裁判所は芸術と人生を結合させていた。それにより被告は事実上責任能力がない振りをしている（simulating）という訴えは、国家が現実と接点を失っているというシニャフスキー自身の主張を強調した。[54] つまりは国家が創作された登場人物と作者本人を同一視するために、芸術は常に実在するシニャフスキーに引き戻され、裁判で彼がいかに「スカース」について論じようと、現実のシニャフスキーが反ソ的な発言の責任がないように「振りをしている」（simulating）ようにしか見えないということになる。

またここではシニャフスキーという現実の作者と、アブラム・テルツというユダヤ風の名前を持つシニャフスキーの変名の間で、創作物である反ソ的な文学作品の責任がどこにあるかという問題について議論になっている。シニャフスキー＝ダニエル裁判においては、書かれた作品と匿名作者をいかにして結びつけることができるのか、という問題について、文体、インクの滲み、証言など様々な方面から世界文学研究所研究員「アンドレイ・シニャフスキー」と作者の「アブラム・テルツ」を結びつける試みが行われた。そのため、現実のシニャフスキーとアブラム・テルツの間だけではなく、そこからさらに作者と登場人物の同一性をめぐる議論が二重に行われていた。

シニャフスキーに関する先行研究がこの裁判の詳細については論じているので、ここではロシアにおける精神医学の文脈に戻ってみたい。[55] ライヒはこの裁判において、国家とシニャフスキーに創造性と狂気に関して異なる理解が芸術創作の過程についてあったとみている。国家がレーニンの「反映論」（теория отражения）を創作の健全さを図る基準にしているのに対し、

シニャフスキーはヴィクトル・シクロフスキーの「異化」（остранение）の理論を基準にしていた。[56]

ライヒによると、マルクスの定式である人間の創造的な「自然の支配」の中で余裕を持たせながら、レーニンは存在と意識を互いに決定する力として、人間の認識を革命的な力を持ったものとして再構成し、1934年にはこの主張はソ連作家協会結成やその規則における社会主義リアリズムの公式の定義の際に美学的ドクトリンとなった。[57] また、反映論の文学への適用に加え、反映の過程を神経系そのものの中に置くことにより、反映論はレーニンの理論に生理学的な説明を与えた反射理論を通して精神医学に入った。[58]

精神医学とシニャフスキー＝ダニエル裁判の繋がりは、精神鑑定による責任能力判定と同時に、その創作に対する国家と作家の理解の齟齬にも現れていた。国家の観点からでは反ソ扇動の罪はそのまま作者に帰せられるものであったが、作者の観点では登場人物の発言は決して作者に着せられるものではなかった。そこにロシアにおける精神医学を重ね合わせるならば、1934年の社会主義リアリズムの公式ドクトリンとなったレーニンの反映論やそれに生理学的な説明を与えたパヴロフの反射理論に対し、シュルレアリスムを好んだシニャフスキー自身の文学観との齟齬が影響していたと言える。

おわりに

レーニンの反映論やパブロフの反射理論、それらが作り出す社会主義リアリズムの文学はシニャフスキーの自己形成期に大きな影響を与え、それは逆説的に彼の作家としての下地として1957年の『社会主義リアリズムとは何か』を生み出すことになる。[59]

1966年のシニャフスキーの文学裁判では、作者である現実のアンドレイ・シニャフスキー、作家名であるアブラム・テルツが同一であるという証明がまず行われた。さらに裁判では文学作品の登場人物の反ソ的な発言に対する作者シニャフスキーの責任が問われたものの、その文学的説明では、「スカース」の技法において作者と一人称の語り手は必ずしも等しくはなく、そ

の意味においてシニャフスキーと登場人物の意見は決して混同してはならないと主張された。

一方、同時代的な精神医学史を通して見えてくるのは、18世期末からの精神医学による刑罰と結びついた裁判における、責任能力を「正気」の個人に求める「狂気」の言説であった。ソ連においては反体制知識人はスターリン期は収容所で矯正されたが、スターリン死後、1960年代には精神病院で矯正されるようになった。シニャフスキー本人は1966年の裁判後に収容所に送られ、1973年にフランスに亡命するものの、ナターリヤ・ゴルバネフスカヤやプリューシチを始め、彼と同じ「第三の波」世代の亡命ロシア人作家には精神病院への収容経験を持つ作家も少なからず見られる。[60] その意味で狂気が反体制と結びつき、精神医学が刑罰と結びつく「狂気」の言説において、シニャフスキーの文学裁判は語られる。フーコー自身が関心を持っていたのも、まさに殺人者や小児性愛者だけでなく、反体制活動家までもが精神異常と認定されるというソ連社会の問題のためであった。[61]

1992年4月にはアムステルダムで初演されたヴィクトル・エロフェーエフの原作のアルフレッド・シュニトケのオペラ『愚者との生活』（Жизнь с идиотом）では「正常」と「異常」の心理を並置する試みがなされ、1993年にはロシアにおける精神分析の歴史を扱ったアレクサンドル・エトキント『不可能なもののエロス』が刊行、1997年にはミシェル・フーコー『狂気の歴史』のロシア語初訳が刊行され、西側での精神医学や精神病院の再評価が行われるようになった。[62]

精神医学と刑罰の問題は必ずしも過去のものではない。2012年8月17日にプッシー・ライオットの三人のメンバーに対して判決が下され、プーチンの辞職を訴える「パンク祈祷」をモスクワの正教会の聖堂で行おうとしたことに対し2年の懲役刑が科され、また、この判決には精神医学鑑定も含まれており「混合性パーソナリティ障害」と診断されている。そこでは25年前に反体制活動家を精神医学監獄に終身刑で送った時と同じ言葉遣いが用いられている。[63] フーコーのロシアにおける受容の問題を含め、ロシアにおける「狂気」の歴史を見た場合、そこに浮き上がってくる精神医学と刑罰の統合という問題は、現在も続く問題として論じられなければならない。

本研究は、科研費基盤研究（C）「ソヴィエトの非公式文学・亡命文学における狂気の言説」（課題番号20K00502）の研究成果の一部である。

キーワード：
狂気、精神医学、収容所、反体制派、アンドレイ・シニャフスキー

注

1 Brintlinger, Angela., “Introduction:Approach to Russian Madness”, p.4.

2 Reich, Rebecca. *State of Madness. Psychiatry, Literature, and Dissent After Stalin (NIU Series in Slavic, East European, and Eurasian Studies)*. DeKalb: Northern Illinois University Press. p.149. ; 日付はAndrei Sinyavskii Papers, Box 4-11. Hoover Institution Archives. Stanford University.

3 Irina Sirotkina. *Diagnosing Literary Genius: A Cultural History of Psychiatry in Russia, 1880-1930 (Medicine and Culture)*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2002. p.11. によると、ロシアにおいてはD.D.フェドートフ（Д.Д.Федотов, 1908-82）により1860年代の改革以前の精神医学の制度化について、T.I.ユージン（Т.И.Юдин, 1879-1949）によるそれ以降のソ連期に至るまでの精神医学の発展の歴史についての影響力のある著作が存在していたが、1950年代以後にはよりアップデートした著作が西側でJulie Vail Brown, Kenneth Dix, David Joravskyなどにより書かれた。

4 Irina Sirotkina. *Diagnosing Literary Genius. A Cultural History of Psychiatry in Russia, 1880-1930*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2002.; Angela Brintlinger and Ilya Vinitsky (ed.) *Madness and the Mad in Russian Culture*. Toronto: University of Toronto Press, 2007.; Rebecca Reich. *State of Madness. Psychiatry, Literature, and Dissent After Stalin*. DeKalb: Northern Illinois University Press, 2017.; 久野康彦「19世紀後半のロシアの精神医学とその発想―精神医学者ウラジーミル・チシ（1855-1922?）による文豪の生涯と作品の分析を手掛かりに―」『「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集』10、北海道大学スラブ研究センター、2005年、1-17頁; 岩本和久「ゾーシチェンコと精神分析」『ロシア・東欧研究』33、2004年、59-68頁。

5 Безумие // Энциклопедический словарь Блокгауза и Эфрона. Петербург, 1891. Т.3. С.315.

6 Безумие // Большой академический словарь русского языка. М., 2004. Т.1. С.504.

7 *Даль В*. Безумие // Толковый словарь живого великорусского языка. Второе издание. Т.1. М., 1978. С.77.

8 *Даль В*. Сумасшествие // Толковый словарь живого великорусского языка. Второе издание. Т.4. М., 1978. С.360.

9 Brintlinger, Angela., “Introduction: Approach to Russian Madness”, p.7.; イワン雷帝についてはBrintlingerの参照した以下の情報による。Harriet Murav. *Holy Foolishness: Dostoevsky's Novels and the Poetics of Cultural Critique*. Stanford: Stanford UP, 1992. p.19.; およびイワン雷帝の匿名に関しては以下を参照。Лихачёв, Д.С. Канон и Молитва Ангелу Грозному Воеводе Парфения Уродивого (Ивана Грозного) [http://likhachev.lfond.spb.ru/Articles/kan.htm]（2022年6月30日閲覧）

10 Reich, Ibid., p.8.

11 Reich, Ibid., pp.8-9.

12 病跡学の背景としてのロシアにおける精神医学の発達については久野による以下を参照。久野康彦「19世紀後半のロシアの精神医学とその発想―精神医学者ウラジーミル・チシ（1855-1922?）による文豪の生涯と作品の分析を手掛かりに―」1-2頁。

13 Reich, Ibid., p.30.

14 Reich, Ibid., p.31.

15 Reich, Ibid., p.32.
アンドレイ・スネジネフスキー（Андрей Владимирович Снежневский 1904-1987）はウクライナ出身のソ連の精神科医で反体制活動家のウラジーミル・ブコフスキー、ナターリヤ・ゴルバネフスカヤ、レオニード・プリューシチなどについての心理状態の鑑定と責任能力の有無について診断書を執筆した。以下を参照。
Глузман С.Ф. Снежневский // Вестник Ассоциации психиаторов Украины. №6, 2013.
http://www.mif-ua.com/archive/article/37767
（閲覧日2022年5月8日）；
Тиганов А.С. Андрей Владимирович Снежневский – ученый, врач, человек // Официальный сайт ФГБНУ НЦПЗ. Без даты.
http://www.psychiatry.ru/stat/278
（閲覧日2022年5月8日）

16 Reich, Ibid., p.32.「異論派」とは宗教的、政治的、社会的な異端者のこと。ソ連の文脈においては反体制知識人を指す。

17 Reich, Ibid., p.43.

18 Reich, Ibid., p.45.

19 Reich, Ibid., pp.49-50.

20 Reich, Ibid., pp.50-51.

21 Reich, Ibid., pp.6-7.

22 ガルシンの精神病については以下を参照。大山麻希子『一九世紀ロシアと作家ガルシン』東洋書店、2010年。

23 Reich, Ibid., p.55.「肯定的主人公」положительный герой/positive heroは作者の道徳的価値観を具現化する文学的登場人物。
ロシア文学では、古典主義では肯定的主人公と否定的主人公の対になったものとして描かれ、リアリズムでは否定的側面をもった肯定的主人公も描かれるようになった。一方ドストエフスキー『白痴』のムィシキン公爵のように否定的側面を全く持たない肯定的主人公を作る試みも行われたが、彼は同時に重い精神病から治ったばかりの人間として描かれている。ロシア文学においては古典文学では肯定的主人公は国民的特性を表現するものとして描かれていたが、ソヴィエト文学では肯定的主人公はそれ以外にも必ず民衆的で、ソヴィエト国家の原則を遵守するように描かれていた。以下を参照。«Положительный герой» (Литература и язык. Современная иллюстрированная энциклопедия. – М.: Росмэн. Под редакцией проф. Горкина А.П. 2006) https://dic.academic.ru/dic.nsf/enc_literature/5290/положительный（閲覧日7月2日）

24 Reich, Ibid., p.56.

25 Reich, Ibid., p.14.

26 Brintlinger, Angela., “Introduction: Approach to Russian Madness”, p.9.

27 フーコー、ミシェル『狂気の歴史　古典主義時代における』田村俶訳、新潮社、1975年、8頁。

28 Brintlinger, Angela., “Introduction:Approach to Russian Madness”, pp.9-10.

29 天田城介「思想と政治体制について　ソ連における精神医学と収容所についての覚書」立命館大学生存学研究センター『生存学研究センター報告』14号、2010年、13-65頁。

30 同上、35-36頁。

31 フーコー、ミシェル「監禁、精神医学、監獄」阿部崇訳、『ミシェル・フーコー思考集成VI　セクシュアリテ・真理』筑摩書房、2000年、464-465頁。

32 フーコー、ミシェル『狂気の歴史　古典主義時代における』、150頁。

33 Brintlinger, Angela., “Introduction:Approach to Russian Madness”, p.12.

34 Reich, Ibid., p.64.

35 Reich, Ibid., p.66.

36 Pospielovsky, D.“From Gosizdat to Samizdat and Tamizdat.” *Canadian Slavonic Papers / Revue Canadienne Des Slavistes*, vol.20, no.1, 1978, pp.44-62. JSTOR, http://www.jstor.org/stable/40867266. Accessed 7 Jul. 2022.

37 *Фуко М.* Слова и вещи. М., 1977.; Фуко М. Воля к истине：По ту сторону знания, власти и сексуальности.. Сост., пер. с фр., коммент. и послесл., С.

Табачниковой. М., 1996.

38 フーコーをテーマとした学会は2000年6月24-25日にサンクトペテルブルクのヨーロッパ大学で開催された。https://davaiknam.ru/text/programma-konferencii-mishele-fuko-i-rossiya
（閲覧日2022年5月14日）構造主義の論集にもフーコーへの言及が見られる。フーコーの名前はドイツの英文学者、文学・演劇研究者のロベルト・ヴァイマンの文章に三回出ている。Структурализм: "за" и "против". Сборник статей. Пер. с англ., фр., нем., чеш., польск. и болг. яз., Под ред. Е. Я. Басина и М. Я. Полякова. М., 1975. С.415, 421, 432.

39 フーコー、ミシェル「『狂気の歴史』初版への序」石田英敬訳『ミシェル・フーコー思考集成I　1954-1963　狂気　精神分析　精神医学』筑摩書房、1998年、193頁。田村俶は「隣人を監禁してみても、人間は自分がちゃんと良識をもっているという確信を持てない」と訳している。フーコー、ミシェル『狂気の歴史　古典主義時代における』新潮社、1975年、7頁。

同じ文章については、ショシャナ・フェルマンも『文学的事象と狂気』にてフーコーの名前を出さずにドストエフスキーの言葉として引用している。フーコーの『狂気の歴史』初版を経由して引用された文章と考えられる。

「「隣人を閉じ込めたところで、」と、ドフトエフスキー（ママ）はどこかで書いている。「自らの良識を確信することはできない。」」

ショシャナ・フェルマン『文学的事象と狂気』土田知則訳、水声社、1993年、515頁。

40 Foucault, M. «“Préface” in Foucault (M.), Folie et Déraison. Histoire de la folie à l’âge classique» Foucault M. *Dits et écrits. 1954-1988. I. 1954-1969*. Paris: Éditions Gallimard, 1994. p.159.

41 *Фокин С*. «Фуко и Достоевский: безумие, история, литература» (Рец. на кн.: Foucault M. Folie, langage, littéraire. Paris, 2019) // Новое литературное обозрение. № 3, 2020.
https://magazines.gorky.media/nlo/2020/3/fuko-i-dostoevskij-bezumie-istoriya-literatura.html
（閲覧日2022年5月5日）

42 ドストエフスキー『作家の日記』4巻、小沼文彦訳、筑摩書房、1997年、334頁。

43 *Достоевский Ф.М.* Дневник писателя // Полн.собр.соч.: В 30 т. -Д.: Наука, 1983. Т.25. С.117.

44 二巻本はFoucault M. *Oeuvres*. Édition publiée sous la direction de Frédéric Gros avec la

collaboration de J.-F. Bert, D. Defert, F. Delaporte et Ph.Sabot. Gallimard: P.,2015. T.1-2.

45 *Фокин, С.* «Фуко и Достоевский: безумие, история, литература» (Рец. на кн.: Foucault M. Folie, langage, littéraire. Paris, 2019).

46 小林康夫、石田英敬、松浦寿輝編『フーコー・コレクション　フーコー・ガイドブック』筑摩書房、2006年、302頁。フランス語経由のフーコーの訳書では思考集成も含め、「プリウチ」という表記が見られるが、ロシア語の発音は正しくは「レオニード・プリューシチ（あるいはプリューシ）」Леонид Плющとなる。

47 小林康夫、石田英敬、松浦寿輝編『フーコー・コレクション　フーコー・ガイドブック』、306頁。

48 В поддержку “Русского музея в изгнании” // Новое русское слово. 31.7.1977. С.3

49 *Гройс Б.* Дневник философа. Париж., 1989.

50 Box 50 File 10. “Otvety na voprosy ankety,” n.d. Andrei Sinyavskii Collection. Hoover Institution Archives, Stanford University. p.4

51 Box 4 File 11. List of material included in the case file deposited in the Tsentral’nyi Arkhiv FSB RF, n.d. Andrei Sinyavsky Papers. Hoover Institution Archives, Stanford University.

52 小林康夫、石田英敬、松浦寿輝編『フーコー・コレクション　フーコー・ガイドブック』、305頁。

53 *Иванов, В.В.* Заявление в юридическую консультацию // Цена метафоры или преступление и наказание Синявского и Даниэля. Великанова, Е.М. (сост.) М:СП «Юноша», 1989. С.460.

54 Reich, Ibid., p.149.

55 Nepomnyashchy, Catherine. *Abram Tertz and the Poetics of Crime*. New Haven: Yale University Press, 1995.

56 Reich, Rebecca. *State of Madness. Psychiatry, Literature, and Dissent After Stalin (NIU Series in Slavic, East European, and Eurasian Studies)*. p.151.

57 Reich, Ibid., p.151.

58 Reich, Ibid., p.152.

59 Reich, Ibid., p.152. 青年時代のシニャフスキーに「反映論」というタイトルの作文がある。ライヒによると所蔵は以下。Hoover Institution Archives, Andrei Sinyavsky Papers, Box 41, Folder 5, «Tetrad’no.6,» pp.1-2.

60 フランス亡命後に出版されたレオニード・プリューシチの伝記には精神病院における刑罰として投薬（主にハロペリドールhaloperidolとサルファ sulphur）が繰り返される様子が描写されている。

「抵抗した患者たちはベッドに数時間あるいは丸一日革紐で結びつけられ罰せら

れ、増量した鎮静剤を与えられ、当直兵に打たれた。「そのせいで今ハロペリドール（抗精神病薬）を受けるのよ」と看護婦たちはぶっきらぼうに言うのだった。サルファ剤は最悪の処罰として考えられた。サルファ剤の注入後に患者の熱は40度まで上がった。注射した部位は痛み、患者は歩き回ることも横になることもできなかった。多くの感謝はサルファ剤注入の結果として痔になった。分量はだんだんと増やされ、あるいは減らされた。」

Plyushch, Leonid. *History's Carnival. A Dissident's Autobiography*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979. p.309.; スリファジン（сульфазин）の薬物投与の問題はナターリヤ・ゴルバネフスカヤの回想でも論じられている。Дело Наталии Горбаневской // Новое русское слово. 29.2.1976. С.2.

61 Foucault, Michel. *Foucault live: (interviews, 1961-1984)*. Edited by Sylvère Lotringer, translated by Lysa Hochroth and John Johnson. New York:Semiotext (e), 1996. p.194.

62 Brintlinger, Angela., "Introduction: Approach to Russian Madness", *Madness and the Mad in Russian Culture*. Ed. by Brintlinger, A. & Vinitsky, I., Toronto: University of Toronto Press, 2007. p.3.

63 Vlassov, Vasiliy. "BMJ BLOG: Psychiatry and Political Dissent in Russia." *BMJ: British Medical Journal*, vol.345, no.7873, 2012, pp.23-23. *JSTOR*, http://www.jstor.org/stable/23278416. Accessed 7 Jul. 2022.

Юкио Накано «Андрей Синявский и дискурс безумия– соединение психиатрии и наказания в России – »

Yukio Nakano

В данной статье рассматривается проблема безумия в истории психиатрии в России. В этой связи уделяется особое значение процессу Синявского и Даниэля в 1966 году. Безумие в истории русской литературы восходит к юродству в средневековье. После создания психиатрической больницы Гаршин в «Красном цветке» (1883) и Чехов в «Палате №6» (1892) тоже касаются темы безумия. Герои изображаются в промежутке между сумасшествием и нормальной психикой. И писатели тематизируют и проблематизируют границу между ними. Безумие в России появляется как узловой пункт психиатрии и наказания. Использование психиатрии в политических целях в СССР долгое время привлекало особое внимание западных интеллектуалов как французский философ Мишель Фуко. Такой же пример политического использования психиатрии можно найти и в аресте членов-активистов группы “Pussy Riot” в 2012 году. Актуальность этого исследования обусловлена судебно-психиатрическими экспертизами диссидентов в политических целях в современной России.

Согласно схеме Амады, история психиатрии в СССР делится на три периода: период психиатризации (конец 18 века – 1930 гг.), период депсихиатризации (1930 – 40 гг.), период репсихиатризации (послевоенные годы – 1960 гг.). В периоде психиатризации сумасшедших помещали в психиатрическую больницу, а в периоде депсихиатризации

– в лагерь. В периоде репсихиатризации диссидентов признали сумасшедшими и поместили в психиатрическую больницу.

В декабре 1965 года произвели судебно-психиатрическую экспертизу вменяемости Синявского и признали его вменяемым. Эта экспертиза тоже свидетельствует о использовании психиатрии в политических целях в СССР. Многие диссиденты как Леонид Плющ и Наталья Горбаневская критиковали использование лекарств в психиатрии в карательных целях.

В заключение мы приходим к выводу, что на фоне развития психиатрии в СССР процесс Синявского косвенно свидетельствует о соединении психиатрии и наказания в СССР. Дихотомия Синявского и Терца переплетается с дихотомией автора и персонажа в творчестве Синявского. Стратегия Синявского проявляется на этой творческой двойственности на фоне дискурса о безумии в Советском обществе.